

学友会ラクロス部における安全管理システム構築の実践研究

亀山 有希 (体育スポーツ科学系)

1. 問題の所在

「負傷者が出たので、これから救急車で搬送します」
年に何回か、クラブの主将やマネージャーから緊急の連絡が入り、その度に「ヒヤリ・ハット」¹⁾する。スポーツ活動を目的とするクラブにとって、このような出来事は日常の活動と隣り合わせであると言っても過言ではない。

2011年3月11日に発災した東日本大震災は「日常下でのリスクマネジメントの重要性」²⁾を訴えかける契機となり、多様な分野でリスクマネジメントのあり様が検討されている。また、スポーツも例外ではなく、日ごろのリスクマネジメントがけがや事故を未然に防ぎ、もしくは最小の被害に留める役割を果たすことは明白である。

本実践研究で取り組む競技ラクロスは、1980年代の慶應義塾高校・慶應義塾大学での取り組み³⁾からスタートしている。1987年には日本ラクロス協会（現：一般社団法人日本ラクロス協会／Japan Lacrosse Association／以下、JLAと略す）⁴⁾が設立され、今日に至っている。

男女のラクロスにおいて最も大きな違いの一つに、男子ラクロスではボディコンタクトが許容されている点が挙げられる。選手はヘルメットや防具類を装着して試合に臨む（女子はアイガードとマウスピースを装着）。このことからラクロスは接触プレーが多いスポーツであり、その特徴を捉えて「地上最速の格闘球技」と称されている。

Xiang et al.⁵⁾はアメリカ国内の高校を対象とした大規模なサンプル（High School Reporting Information Online）を用いてラクロスのけがに関する実態を明らかにしている。その調査結果では、①練習中より試合中の方がけがをする割合が高い、②男子は女子よりも負傷率が高い、③男女ともに捻挫・筋違い（男性：35.6%女性：43.9%）および脳震盪（男性：21.9%女性：22.7%）による負傷率が最も高いというように、ラクロスによるけがの発生パターンは運動の場面と性別

によって異なることが示唆されている。また、日本国内の研究においては、関戸⁶⁾が女子ラクロス選手の傷害について着目し、傾向をまとめている。

このような状況から、アメリカラクロス協会（US Lacrosse）⁷⁾では、ゲームをより安全にするために「1998年以来、ラクロス固有の研究のために100万ドル以上の投資を行う取り組み」や、HP上で「Safety」のコーナーを設け、ラクロスに特化したけが・事故について正しい知識と対応の仕方といった啓蒙活動を展開している。例えば、「Concussion Awareness」⁷⁾では、脳震盪に関わる知識理解のために、ポスター作成やYouTube上でアニメーションを公開し（脳震盪の症状等：1身体的な問題、2思考に関する問題、3感情の問題、4睡眠障害）、わかりやすく、より身近なものとして紹介している。また、JLAにおいても「Team-up Speak-up Day8」⁴⁾を推奨し、脳震盪に対する知識的な理解と予防の必要性を呼び掛けている。特に頭部のけがは命にかかわることがあり、ラクロス活動の現場では重大事故を防ぐための取り組みが続いている。

スポーツ活動を通じては、誰もがリスクと隣り合わせである。例えば、「中学・高校で起きる事故の半分以上は運動部の部活動中で、年間35万件に上る」⁸⁾との報告からも、部活動においては、いかに事前の予防対策が重要であるかが伺える。一方で、実際の部活動中のけが・事故に目を向けてみると、予防対策をしていたにも関わらず、事故を防ぐことができなかったケースも少なくない。

朝日新聞は「硬球直撃 予防策を尽くしていたが」⁸⁾との見出しで、熊本県立熊本西高校（熊本市）で行われた野球部と他校の練習試合中に起きた死亡事故の発生を報じている。桐田明日香さんの事故⁹⁾は通称「ASUKAモデル」として、救命救急の現場で数多く取り上げられている。「ASUKAモデル」においても、「当該校の教員が救命講習を受講済みであったにもかかわらず、適切な救命活動ができなかった」⁹⁾ことが論点の一つとなり、安全管理とは何かを根底から問い直すものとなった。体育・スポーツの指導者を数多く輩

出している日本体育大学でも、「学校・部活動における重大事故・事件から学ぶ研修会」を日本体育大学スポーツ危機管理研究所¹⁰⁾が主催し、「ASUKAモデル」を通じて「救える命を救うことの大切さ」についての重要性が報告された。

昨今、運動部において「クラブ活動」と「リスクマネジメント」は車の両輪のように考えられている。しかし、部活動の指導者・責任者の視点に立って考えてみる時、その理論と実際の部活動現場には大きな開きがあるように思えてならない。

以上の背景から、プレーヤーのみならず保護者やコーチ・部長といったクラブの総体において、安全な環境で活動できるための意識の醸成と仕組みづくりがあらためて必須だと考える。

2. 本研究の目的

本研究では大規模型クラブを対象に部長へのヒアリング調査を実施し、課題を抽出した。抽出された課題の解決に向けて実践的に安全管理システムの構築に取り組み、その成果と今後の課題を明らかにすることを目的とする。

3. ヒアリング調査の概要

1) 対象および期間

本研究では日本体育大学学友会ラクロス部の部長・コーチスタッフならびに所属部員190名(2019年4月現在)を対象とし、2019年4月～2020年3月末の1年間を課題の抽出ならびに実践に取り組む期間と設定した。

2) 方法

2019年4月～5月にかけてラクロス部部長へのヒアリングを行い①クラブの課題を抽出する。2019年6月から2020年3月までに②課題解決のための実践的な取り組みを行い、③安全管理システムの構築による組織の変化をまとめる。

3) 結果

日本体育大学コーチングエクセレンスセンター(NSSU Center for Coaching Excellence)が実施するコーチングサポートの一環として、部長へのクラブ運営に関するヒアリングを実施した。半構造化インタ

ビューの形式を用いて日頃の悩みや気になっている事柄などを言語化した。2019年4月下旬～5月末までの期間に4回にわたってヒアリングを行った。表1はヒアリングごとに抽出されたクラブの課題をまとめたものである。前回のヒアリング結果を掘り下げる形で聞き取りを継続した結果、段階を経るごとに漠然とした不安から具体的な課題へと焦点化されていることが分かる。

以上のことから、「(1) 組織体制の見直しと再構築」、「(2) クラブ情報の集約と活用」、「(3) フィールドにおける安全性の確保」の3つに課題を限定した。

表1 ヒアリングにおける課題抽出

ヒアリング調査と記録の整理(2019.4月下旬～5月)	
①ヒアリング1回目 2019年4月24日(3時間)	
部長の不安を整理する	[不安因子] ①相談先がない ②ラクロスを知らない(知識と経験) ③ラクロス特有のけがの問題 ④現状の安全管理に対する漠然とした不安 ⑤ワークバランス
②ヒアリング2回目 2019年4月28日(3時間)	
クラブの課題領域を整理する	[課題領域] ①クラブ運営に関わる課題 ②安全性確保に関わる課題 ③保護者との連携 ④地域連携・社会貢献活動 ⑤学業・クラブ活動・就職活動の両立
③ヒアリング3回目 2019年5月9日(3時間)	
クラブの課題領域(②)から現状を整理する(上位課題3つ)	[クラブの現状から抽出された課題] ①クラブ運営に関わる課題 ・組織の在り方に対する見直し ・コーチ制度の確立 ・年間スケジュールと予算の再検討 ・部則・誓約書の再検討 ②安全性の確保に関わる課題 ・活動スケジュール管理が紙ベース ・緊急時の対応(応急処置から保護者連絡まで)が不明確 ・けが・事故等の記録が一元化されていない ・現行の連携方法によるタイムラグの問題 ③保護者との連携
④ヒアリング4回目 2019年5月23日(3時間)	
最優先課題を絞る	[最優先事項の確定] ①組織体制の見直しと再構築 ②クラブ情報の集約と活用 ③フィールドにおける安全確保

(1) 組織体制の見直しと再構築に関する取り組み

ラクロス部が学友会に昇格し30年が経過する中で、クラブ運営の変遷を示す資料(組織体制やクラブ運営の詳細等)はアーカイブ化されていない。

現状のクラブ組織には、①3・4年生の学生役員で

構成されるクラブ運営のための組織、②3・4年生の学生役員で構成されるラクロススキルや競技を検討するための組織、③「ファミリー」と呼ばれる異学年で構成される小グループの3つの組織が存在している。しかしながら、クラブ活動に参画する部員は、組織のイメージは持っているものの役割が少ない下級生ほど具体的な組織の機能・役割を共有するのは困難であるようだ。

また、コーチ組織との連携においても同様のことがいえよう。日本国内にラクロスが広がってから35年が経過しているが、ラクロスのコーチを専門職としているケースは数える程である。その多くはパラレルキャリアとする社会人コーチへの委託となるため、改めて組織間の連携を検討し、安全確保の仕組みを作る必要がある。

(2) クラブ情報の集約と活用に関する取り組み

これまで活動計画は紙媒体 (Word) にて定期的 (月に1回程度) に主将から部長に報告されていた。学友会ラクロス部はラクロス部男子・ラクロス部女子の2つの組織を合わせて1つのクラブとなっている。それぞれには競技スキルに応じたチームが3つずつ (トップチーム・インパクトチーム・育成チーム) 存在し、6つのチームが常に稼働しているため、他大学との合同練習や遠征等も含めると、日々、スケジュールも変化していく。

そのため、安全確保ができる環境作りの一環としてクラブ全体の情報を一元化し、活用する仕組みを構築することが急務であると考ええる。

(3) フィールドにおける安全性の確保に関する取り組み

ラクロスはコンタクトスポーツでもあることから重篤なものになると「脳震盪」や「前十字靭帯断裂」といったけが・事故が発生しやすいというリスクを持ち合わせている。ゆえに、部長やコーチスタッフをはじめ、部員一人ひとりがラクロスの競技性とラクロスに伴うけがや事故に対する正しい知識を身に付け、救命救急のスキルを習得する必要がある。

また、常に指導者や責任者がクラブに帯同しているわけではない。そのため、①緊急時の対応方法の再検討、②個人情報データベースの構築 (命のカルテ)、③保護者との連携、④けが・事故に対する正しい知識や救命救急のスキル習得、⑤けが・事故記録のアーカイブ化について検討する必要がある。

4. 各課題に対する実践の概要

1) 組織体制の見直しと再構築のための実践的取り組み

クラブ内には学生組織とコーチ組織の2つが存在しているが、大規模型クラブであるため、現状の縦の連絡系統を中心としたクラブ運営では意思疎通や詳細情報の共有には限界がみられる。既存の組織に加えて学年を柱とした横のつながりを重視した横断的な組織を編成し、コミュニケーションの活性化を図るとともに活動に応じた係を新設した。

(1) 学生組織

既存の組織がどのような係や役割で構成されているのかを図式化し、誰もが分かるように可視化した (図1)。また、組織図を基にクラブ活動や行事、リーグ戦などの活動に照らし合わせながら係の必要性と役割を整理した。係の役割は次の通りである。

- 既存：3・4年生で構成するクラブ運営を担う学生組織 (縦の組織)
主将、副主将、主務、副主務、会計、マネージャー
- 既存：3・4年生で構成する競技スキルを検討する学生組織 (縦の組織)
アタックリーダー、オフンスリーダー、ディフェンスリーダー、トレーナー
- 既存：ファミリー (1～4年生で構成する異学年の小グループ)
クラブ活動、ラクロススキル、大学生活などの共有・相談や交流
- 新設：1～4年生の学年代表 (横の組織)
- 新設：保護者係、地域社会貢献係など (学外との連携組織)

(2) コーチ組織 (組織開発部の新設)

クラブ全体の運営を検討する組織として組織開発部を新設した。組織開発部は男女それぞれのチームからヘッドコーチ (以下、HCと略す)、ゼネラルマネージャー (以下、GMと略す)、アシスタントマネージャーを招集し、部長を含めた7名を構成員とした。

HCはラクロスのスキル面を中心としたチーム運営、GMはラクロスの組織面を中心としたマネジメントとといったように役割分担を明確にした。

また、学生組織と連携しラクロス部全体の取り組みを検討する部署を設置した。この取り組みに紐づけて

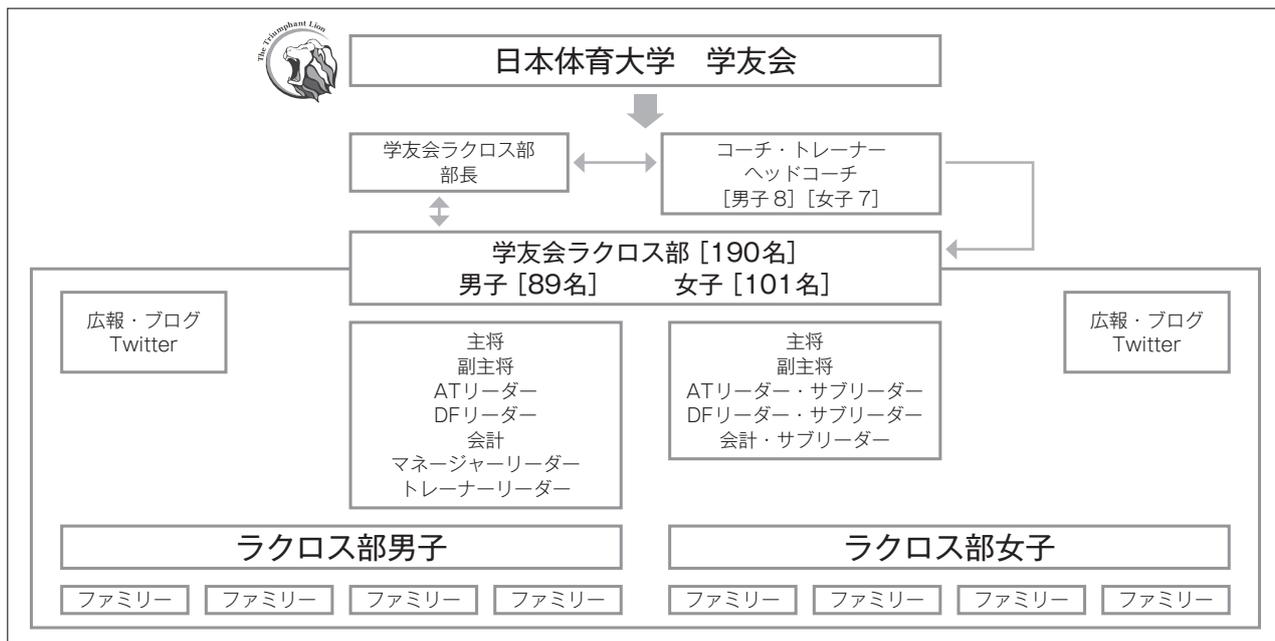


図1 学友会ラクロス部組織図 (2019.3現在)

組織開発部と学生の代表者が検討する場として「タウンホールミーティング」を実施し、「コミュニケーションの質の向上」と「課題解決と情報共有」に取り組むこととした。タウンホールミーティングとは企業の経営戦略の一つで、経営トップや若手社員などそれぞれ立場の異なる者が一堂に会して経営全体の状況や戦略について対話するものである。この「タウンホールミーティング」の様子はデジタル配信し、ラクロス部の構成員であればだれもが参画できる公開型システムを導入した。

2) クラブ情報の集約と活用に関する

取り組みの実践事例

(1) デジタル情報の集約と活用

これまでの情報集約は紙面上やメールで行っていた。情報管理の方法を見直し、デジタル管理に切り替えることとし、一度に情報を集約して有効活用できるテクノロジーツール(各種アプリ)の導入を行い、情報の集約と活用の仕方を整理した。

- スケジュール情報の管理

練習への出欠席確認・6チームの活動状況について「いつ・どこで・だれが・どのように活動しているか」の情報を一元管理するためにスケジュール管理アプリ (TimeTree、TeamHub) を導入した。

- コミュニケーションの最適化

連絡方法をコミュニケーションアプリ (LINE) に統一することを決定し、プロジェクトやテーマごと

のグループを作成してプロジェクトの推進を図ることとした。

- 情報のアーカイブ化

デバイス上でアクセス可能なドライブ (GoogleDrive) を活用することとした。

3) フィールドにおける安全性の確保に関する

取り組みの実践事例

(1) 命の個人カルテの作成とデジタル管理

命の個人カルテでは「既往歴・食品アレルギー」や「緊急連絡先」など、安全確保に必要な情報を入力するフォーマット (表2) を作成し、部員・コーチスタッフが基本情報と最新情報を記録するようにした。また、命の個人カルテはデジタル化し、部長が一元管理を行うこととした。部長は研究室のパソコンやスマートフォン、タブレットなどのスマートデバイスに命のカルテを保管し、パスワード管理をすることで「いつでも・どこでも」閲覧できるよう環境設定を行った。

(2) フィールドにおける安全確保に関する

取り組みの実践事例

フィールドの安全確保ではラクロスに特化したけがや事故を想定して、その場に居合わせた人が救助者として救助にあたるよう救命救急の基礎知識 (講義) とラクロスに特化した応急処置 (実践) の機会を設定した。この救急実践講座開講の企画・運営では、学生主体の運営組織を立ち上げて組織開発部と連携

表2 命の個人カルテフォーム

【日本体育大学 学友会ラクロス部】			
2019年度 命の個人カルテ			
年 月 日 現在			
ふりがな		写真	
氏名			
学年			
学籍番号			
所属学部/学科/コース			
ポジション			
コートネーム		部内の役職	
ケイタイ番号		e-mail	
現住所			
大学までの通学経路 (自宅を出てから、大学に到着するまで)	【通学区間/移動手段】 例：自宅～青葉台駅(徒歩10分) 青葉台駅～桜新町駅(田園都市線30分) 桜新町駅～世田谷キャンパス(徒歩15分)		
	【所用時間】		
保護者氏名(ふりがな)			
実家住所			
緊急連絡先(電話)	*必ず連絡がつくところ(複数)		
スポーツ歴	記入例/小学校1～6年生:バスケットボール 中学・高校:ダンス		
掛りつけの病院(所在地・電話番号)	(/)		
既往歴(けが・メンタル・アレルギー等含む/症状・治療歴等)	記入例/無関節ヘルニアの手術(大学1年生)を行った。治療は手術後から現在まで定期的に病院に通っている。また、食品アレルギー(ピーナッツ)がある。		

しながら準備を進めた。講師は事前にラクロス部のフィールド練習も参与観察した上で、「活動時のチーム規模」「参加人数」「練習内容」「ラクロスに特化したけがと事故」等を確認・検討し、「ラクロス部版の救命救急講習をロールプレイングで展開すること」を決定した。当日は保健医療学部救急医療学科との連携のもと、共同参画型プロジェクトと位置づけ活動を展開した(表3)。

(3) 保護者との連携による安全確保に関する 取り組みの実践事例

クラブ活動中にけがや事故が発生した場合には保護者との速やかな連携は必須である。これはクラブ運営そのものにも言えることである。これまでの保護者会は新入生と卒業学年を中心とした説明会と位置づけ、参加人数も10名ほどであった。しかし、「部員自らが日ごろのクラブの取り組みを報告し、感謝を伝える会にしたい」「応援されるチームになりたい」と主将から提案があり、「また来々となる保護者会」と題して学生主体の企画・運営を行うこととした(表4)。

表3 フィールドでの安全確保の取り組み

フィールドでの安全確保の取り組み	
日時: 2019年7月27日 10:00-12:00 対象: 学友会ラクロス部 190名 場所: 日本体育大学世田谷キャンパス教室・多目的グラウンド 講師: 日本体育大学保健医療学部 鈴木健介准教授(救命救急士) 日本体育大学保健医療学部教員、学部生15名	
①ラクロス部版救命救急実践講座「自助・共助を生み出そう」	
活動概要	活動1: 講義(教室) ▽「緊急事態発生」体験 緊急事態が発生した時に、ヒトはどういう心理や行動をとるか ▽緊急時の記録の取り方について ▽呼吸の確認方法・観察方法、脈拍の測り方、心肺蘇生法等の実践
活動の様子	写真1 脈拍の測り方 
②ラクロス部版救命救急ロールプレイング	
活動概要	活動2: 実践(グラウンド) ▽ロールプレイングの実施 練習: 試合中の接触による頭部外傷・肉離れ・熱中症といったいくつかのパターンを想定し、講師・学部生によるレクチャーと部員によるロールプレイングを実施した。 ▽練習環境の確認 緊急時が起きた場合の避難場所の確認やAEDまでの実際の距離、学外で事故が起こった時の対処、準備についての確認を行った。
活動の様子	写真2 脳震盪の対応 

表4 保護者との連携による安全確保の取り組み

保護者との連携による安全確保	
日時：2019年7月27日 13:00-16:00 対象：学友会ラクロス部 190名 場所：日本体育大学世田谷キャンパス教室 参加者：保護者92名	
①「また来なくなる保護者会」	
活動概要	▼保護者係を学年ごとに設置し、SNSコミュニケーションツール(LINE)を活用して任意の保護者グループを作成した。また、保護者係を通じて保護者会の案内をアナウンスした。 ▼ラクロス部版救命救急実践講座「自助・共助を生み出そう」とのタイアップを行い、安全確保のための取り組みについて保護者にも見学・参加を募った。実際に有給休暇を取得して参加する保護者の姿も確認することができた。 ▼保護者会の開催 第1部：ラクロス紹介 ファッションショーの形式を取りながら、ラクロスのユニフォームや防具・クロスなどを紹介 第2部：学生主体のクラブ活動・会計報告と懇親会(写真3) 年間スケジュール、戦績、会計監査報告(予算・決算・部費・遠征費等)、リーグ戦の案内など 第3部：部長・GM・HCによる報告 ラクロス部のクラブ運営と組織体制、けがや事故対応、保険、会計監査報告(全体)、チーム指針、社会貢献活動など
活動の様子	写真3 保護者会第二部での活動報告(ラクロス部男子・女子に分かれて) 

5. 本研究のまとめと課題

本実践研究では学友会ラクロス部を事例として取り上げ、安全管理システムの構築に取り組んだ。

組織体制の見直しと再構築のための実践的取り組みでは、学生組織は従来の上級生を中心とした縦の組織(組織マネジメント・スキルマネジメント)、ファミリーと呼ばれる異学年で構成される小集団に加え、学年間の横の連携を軸とした横断的組織を新設し、3つの組織体制に活動内容を関連付けて見直しを図った。トップダウン形式の連携のみでは部員間の意思疎通は生まれにくく情報の詳細までを確認することは難しい。この取り組みをきっかけに、クラブ内の役割分担が明確化され、クラブ組織がどのように機能していく必要があるのかが少しずつ見え始めている。ま

た、学生組織の相談窓口となり、後方支援の役割を担う組織開発部を新設したことで部員がより自発的に発信し行動する機会が増え始めた。後の近隣マンションへの社会貢献活動の提案などにつながっている。図2は組織体制の見直しと再構築のための実践的取り組み後のラクロス部組織であるが、図1と比較して運営の目的ごとに大小様々な組織・チーム・係の存在を確認することができる。

クラブ情報の集約と活用に関する取り組みでは、「クラブ情報の集約と活用」「命の個人カルテの作成とデジタル管理」に取り組み、デジタルツールを活用することで情報の一括管理とオンタイムでの情報更新を実現することができた。また、「命の個人カルテ」の作成では、けがや既往歴・アレルギーなど心身に關わる情報や緊急連絡先といった個人情報を集約し、いつでもどこでも確認できる環境作りを実現することができた。その結果、迅速に部員の情報にアクセスすることが可能となり、フィールドで活動している部員・コーチや保護者との連携が図れるような体制が生まれた。また、けがや事故の件数や発生状況をデータとして蓄積し、活用することも可能となった。

フィールドにおける安全性の確保に関する取り組みでは、実践的なスキルを身に付けることを目的としてラクロス部版救命救急実践講座「自助・共助を生み出そう」を開催した。ラクロスに特化した緊急時の対応(応急処置から保護者連絡まで)が明確となり、ロールプレイを通じて救命救急の基礎とラクロスに特化した対応方法について実践的に学ぶことができた。この取り組みを経てラクロス部では「ラクロス部版緊急対応フローチャート」を策定(図3)し、部員全体で共有・運用することとした。

さらには、保護者との連携にも着目し、「また来なくなる保護者会」と題した保護者会を開催した。保護者の参加は92名を数え、ラクロス部の取り組みを発信する機会と同時にラクロスの競技特性や緊急対応の方法についても直接的に保護者へ報告する機会を設けた。「もしも」の場合にどう対応していくかをクラブ側と保護者側で共通認識を持つことが可能となった。この取り組みはクラブ内に保護者係を設置することで継続が可能となり、コミュニケーションツール(LINE/任意)の活用で日常的な対話の機会も増えている。現在は新型コロナウイルス感染症が蔓延し深刻な状況であるが、構築した安全管理システムを基盤にクラブの活動自粛や再開の対応に活かすことがで

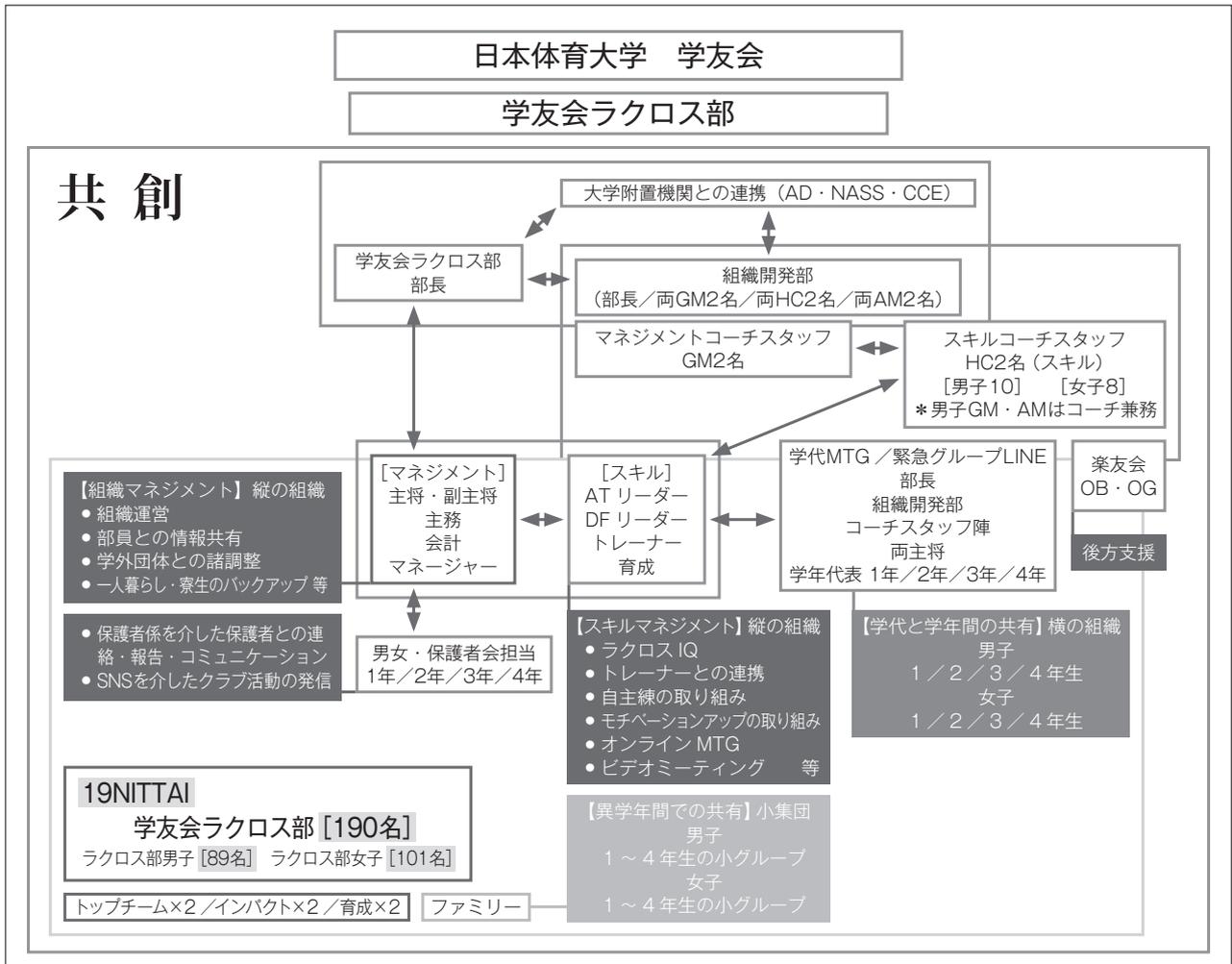


図2 学友会ラクロス部組織図 (2020.3現在)

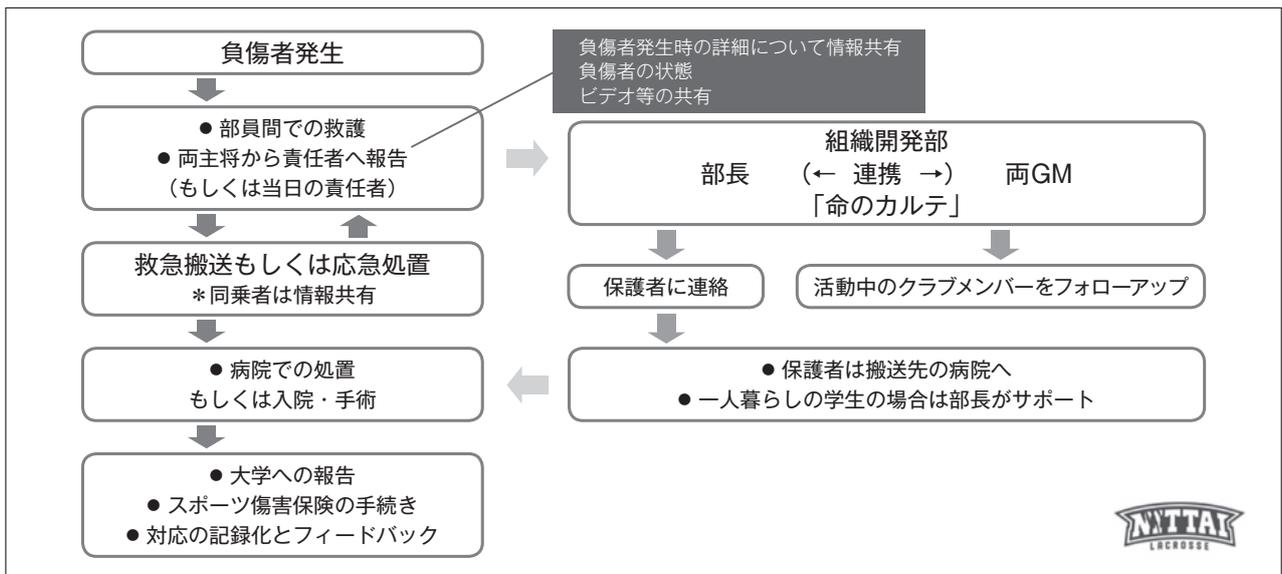


図3 ラクロス部版緊急対応フローチャート

きている。また、ガイドラインの策定についても迅速に情報共有や対処できる体制を築くこととなり、リスクマネジメントの重要な役割を担っている。

以上の実践的な取り組みをまとめたものが、「組織づくりと安全管理システム構築の流れ (表5)」と「組織づくりと安全管理システム構築の展開図 (図4)」である。

特に大規模型クラブにおいては、一人ひとりが安全確保のための知識とスキルを身に付けることに留まらず、組織という土台の上に安全確保の運営を位置づけることや保護者と連携することが重要と言えよう。田中はスポーツに関わるリスクマネジメントにおいて「リスクマネジメントを行う上で最も重要なこと

は、組織づくりと組織の力量を見極めることであり、組織が対応できるリスクの特定、対応できるリスクの分析を行い、その上でリスクマネジメントの計画を推進すべきである」¹¹⁾と指摘している。

今後はさらにリスクマネジメントが可能となるよりよい組織づくりに焦点をあて、学習する組織¹²⁾や

表5 組織づくりと安全管理システム構築の流れ

組織づくりと安全管理システム構築の流れ				
①組織による安全確保				
課題	現状(2019.3まで)	問題点	取り組み	取組後の変化(2020.3現在)
組織の機能と役割	組織や係はあるものの機能を活かしきれていない	・クラブとしての目標と組織、係、部員のアクションがつながりを持っていない	▼学生組織の見直しと組織開発部の設置 ・学年代表の設置 ・係の見直し ・組織開発部の設置	・組織を組織運営面と競技スキル面の2軸を中心に、各プロジェクトや係・組織開発部と連携 ・横の組織(学年代表)を導入し連携が活性化 ・保護者係など学外と連携する組織の新設
②クラブ情報の集約と活用				
課題	現状(2019.3まで)	問題点	取り組み	取組後の変化(2020.3現在)
スケジュールをはじめとする情報管理	メールでの共有専用用紙に記録	・情報更新と共有のスピードが遅い ・データの管理が困難	▼テクノロジーサポートの導入 ・スケジュール管理アプリ(Time Tree, Team Hub)を導入し、スケジュール情報管理の一元化 ・コミュニケーションアプリ(LINE)を導入等	・いつでも、どこでも、誰でもが一度にスケジュールを確認・更新することが可能(可視化) ・プロジェクトごとの対話が増え、効率化を実現
③フィールドでの安全確保				
課題	現状(2019.3まで)	問題点	取り組み	取組後の変化(2020.3現在)
けが・事故発生の対応	けがや事故が起きるごとに場当たりに対応	・対応方法が統一されていない	▼フィールドにおける安全性確保に関する取り組みの実践 ・命の個人カルテの作成とデジタル管理 ・フィールドでの安全確保 ラクロス部版救命救急実践講座「自助・共助を生み出そう」	・命に係わる個人データの収集と運用が可能に ・ラクロスに特化した救助方法の習得 ・講座受講後にフローチャートを新たに作成 ・けが・事故情報のアーカイブ化
④保護者との連携による安全確保				
課題	現状(2019.3まで)	問題点	取り組み	取組後の変化(2020.3現在)
保護者会の位置づけ	毎年10名前後の参加	・クラブ活動の現状を伝える機会がない	▼保護者会との連携 ・保護者用LINEの設置と活用 ・「また来なくなる保護者会」の開催 ラクロス紹介/クラブ活動報告	・92名の保護者の参加 ・保護者係を通じて保護者会との連携が常態化

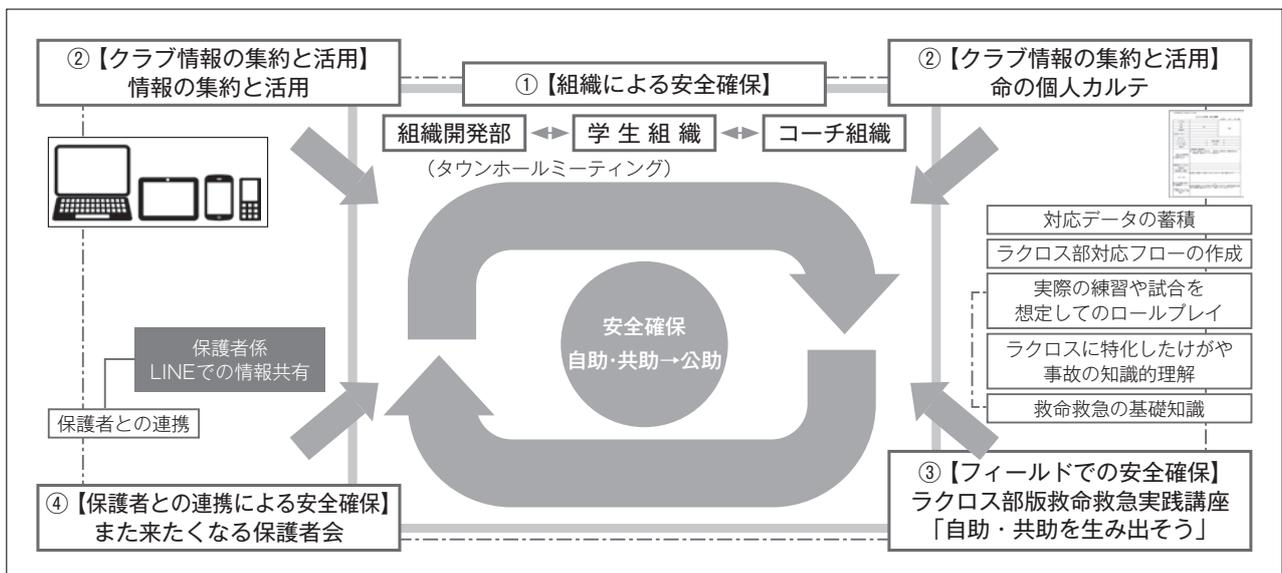


図4 組織づくりと安全管理システム構築の展開図

ティール組織¹³⁾といった目的のために進化し続けられる組織を柱としたクラブ運営を目指したい。また、安全管理システムを定期的に見直し、課題改善を継続しながらその効果についても検証していきたい。

謝辞

本実践を進めるにあたって関わって下さった全てのみなさまに、この場を借りて深く御礼申し上げます。

この取り組みは「第1回 UNIVAS AWARDS 2019-20 安全確保に関する取り組み優秀賞」を受賞しています。

註および引用文献

- 1) 医療安全対策検討会議, 2002, 厚生労働省, 医療安全推進総合対策 ～医療事故を未然に防止するために～
- 2) 野口和彦, 2011, 東日本大震災のリスク論による総括, 安全工学50, 501-507
- 3) 一般社団法人日本ラクロス協会, アーカイブサイトRelax
<https://archive.lacrosse.gr.jp/history/> (2020.2.15参照)
- 4) 一般社団法人日本ラクロス協会,
<https://www.lacrosse.gr.jp/> (2020.2.15参照)
- 5) Xiang, J. Collins, C.L Liu, M.A.D McKenzie, L. B Comstock, R.D. Years 2008-2009 Through 2011-2012, Lacrosse injuries among high school boys and girls in the United States: Academic
- 6) 関戸健一, 小林直行・泉重樹・成田崇矢編著, 2013, 女性アスリートのための傷害予防トレーニング
- 7) US Lacrosse, Concussion Awareness
<https://www.uslacrosse.org/safety/concussion-awareness> (2020.2.15参照)
- 8) 朝日新聞デジタル, 中高の事故、半数は部活で柔道技や打球…頭をどう守る,
<https://www.asahi.com/articles/ASM4S7RJ2M4SUUPI010.html> (2020.2.15参照)
- 9) 桐淵博, 2019中学校保健体育科ニュース032, 大修館書店, pp.2-4
- 10) 日本体育大学スポーツ危機管理研究所

2018年4月にスポーツ活動全般をめぐる危機管理上の問題事象(事件, 事故, 傷害, 体罰・ハラスメント, ドーピング等)を研究対象とし、その予防・対応・改善の具体策について探究することを目的に設置された。

<https://www.nittai.ac.jp/kikikanri/about/index.html> (2020.1.25参照)

- 11) 田中利佳, 2016, スポーツイベントのリスクマネジメント: ISO31000を指針として, 鈴鹿大学紀(23), pp.45-55
- 12) ピーター・M・センゲ(著), 枝廣淳子・小田理一郎・中小路佳代子(訳), 2018, 学習する組織システム思考で未来を創造する, 英治出版
- 13) フレデリック・ラルー(著), 鈴木立哉(訳), 2019, ティール組織 マネジメントの常識を覆す次世代型組織の出現, 英治出版

註) ティール組織はフレデリック・ラルーによって提唱された組織概念である。歴史的変遷からみた人類のパラダイムと組織の発達段階を整理し、組織フェーズを5段階(衝動型・順応型・達成型・多元型・進化型)に分けてとらえている。進化型を指す「ティール組織」は(1)セルフマネジメント(2)ホールネス(3)進化的目的という特徴を持ち、「中央からの指令なしに常に部分変動するという意味で『生物』のような組織だ」と著書の中でラルーは述べている。

(受理日: 2021年2月26日)